

第六章 イリライナー宮殿

「発電所や軍艦の原子炉はもちろん核弾頭も全部処分したのに、なぜ核兵器があるの？」

「ウランやプルトニウムはいくらでもある。作ろうと思えば簡単に作れる」

榊が答えると加藤が追加する。

「ノロに完璧を求めることは不可能でしょう。ある程度までやればあとは万事よろしくだからイリが苦笑いする。

「そうね。ノロに完全を求めること自体が大間違い。元々いい加減な性格だもんね」

加藤が残念そうに頷く。

「ノロは核兵器の処分をしたが独裁者の処分を忘れていた。というよりそれぞれの国民がすべきことだと考えたのだろう」

しかし、榊が反論する。

「放射能を味方にしたグレーデッドの総統を追い詰めたのはノロだ。加藤、忘れたのか」

「忘れるものか。しかし、一時的とは言え私は総統を信奉した。それは福島原子力発電所の事故でグレーデッドに助けられたからだだった」

「独裁者というのにはある意味非常に魅力的な側面を持っている。そうでなければ短期間に強固

な組織を作ることではできない」

「そのとおり。でも矛盾を感じてグレーデッドから離脱した。そしてノロに出会った」
イリが口を挟む。

「昔話はいいわ。とにかくいつの間にか強烈な独裁者が出現して地球が大変な事になっているわ」

「ソシアの大統領プチレンコンだな」

「他にも感染したように独裁者たちがあちこちで増殖しているらしいの」

「プチプチレンコンか」

「都合のいい選挙制度に変更して半ば強制的に投票させているの。取り巻き連中に利権を与えて周りを固める。国民から見れば詐欺師だわ。弾圧詐欺師よ」

「隣りの国から見れば武装詐欺師だ」

加藤が補う。ここで艦橋の立体浮遊立体スクリーンに地球が映し出される。

「いつ見ても美しい惑星だわ」

榊がやんわりと言葉を返す。

「ノロの惑星の方が美しい。透明感が違う」

加藤が大きく頷くとイリもつられて小さく頷く。

*

宇宙戦艦がイリライナー王国の首都イリを目指す。高々度から政府に連絡してからイリひとり時空間移動装置で国民会議場前の広場に移動する。女王が凱旋すると勘違いした政府は大急ぎで歓迎式典の準備を始めるが当然間に合わない。

国民会議場前の広場に現れた時空間移動装置に国中が驚くとともに大歓声にわく。跳ね上がったドアから現れたイリに国民会議議長がうやうやしく近づく。緊張のせいかな言葉が上滑りする。

「長い間、お待ちしております。ところで弟……じゃなかった。婿殿……のノロ殿は？」
「むこ？」

イリはいったん首を傾げるが、すぐにからかうかのようにのたまう。

「別居中です」

「別居！ なんと！」

イリは国民会議場の奥にあるはずの宮殿に向かう。

「私の留守中にな変わったことは？」

「激変しました。国内は女王様のご威光で平穏ですが周りは紛争や軍事クーデターで騒がしいのです。中華民国やソシア連邦から嫌がらせがありました。幸いなことに今はありません。

ただ……」

「ただ？」

「別居する夫婦が増えました」

「私のマネをしているの？」

「いいえ。徐々にです」

「どういうこと？」

「男女平等になったと言うことです」

話題がずれたがイリはむしろ議長の脱線を受け入れる。

「それはいいことだわ」

「ところが問題が……」

話に夢中になって議長は宮殿に到着したことに気付かない。城門が開くとイリは躊躇なく門をくぐる。慌てて議長が後を追いかける。

「どんな問題が起こったのですか？」

議長が恐る恐る言葉をつなぐ。

「イリライナーは女王様の国です」

「いいえ。私は飾りです。女王と言っても独裁者じゃありません」

「すべての国民は一応納得しております」

イリが驚くいて立ち止まる。宮殿自体が驚くほど大きくなっている。中に入ると装飾はもちろんのこと調度品が絢爛豪華になっている。

「これはどうしたことなの。『質素に』と何度も言ったのに」

イリが議長をにらみ付ける。議長は数歩遅れて付いてくる行政府長官の後ろに隠れる。行政府長官は慌てて議長の後ろに隠れようとする。

「長官がしたことで私は何もしてません」

議長の言葉を遮って長官が反論する。

「国民会議が決めたのでそれに従って実行しただけです」

イリが二人の言い訳を遮断する。

「と言うことは国民が私の方針を否定してこのような豪華な宮殿にしたとでも？」

「まあ、そういうことになります」

イリは少し気を落とすが明るく振る舞う。

「私は独裁者じゃありません。国民が決めたのなら従います。でも余り華美にはしないでほしい。予算はできるだけ教育や福祉に向けてほしいの」

議長も長官も胸をなで下ろす。女王が「宮殿を豪華にした本当の理由」を尋ねなかったからだ。しかし、いずれ本当の理由を説明しなければならぬことは承知している。

*

ノロはイリライナー王国の女性に人気があった。そしてこともあろうか男の国王を望んでいた。イリはなりたいたいと思って女王になったわけではなかったし、祭り上げられただけなので地

位にわだかまりはない。国民がノロを国王にと望むのであれば反対するつもりはなかった。

しかし、気質から言ってノロが歴史上最も無責任で気ままな国王になることは目に見えてい
る。しかも本人もなりたくないはず。

「ところで問題というのは？」

「我が国は女王様の国です。でも留守がちなので周辺大国が虎視眈々と狙っています」

「狙っている？ 侵略しようとしているの？」

「そうです。女王様と言うよりノロ様がいないうちにと言うような雰囲気です」

イリは驚く。

「防衛力は保持していますか」

「ぜんぜん」

長官の即答にイリの表情が厳しくなる。

「世界最強と言われた騎馬軍団を持っていたのは随分昔の話です」

イリはウクライナー共和国に起こった危機が自国にも波及するかも知れないと危惧する。

「今はあのグレーデッドの侵略を食い止めた伝説の国家という誤解があるので凌げていますが、
いずれこの看板は剥がれるでしょう。だから威厳を保つために宮殿を絢爛豪華に改装しました」

イリはショックを受けて勧められるままに立派な椅子に座ると頭を抱え込む。しばらく考え
た後微笑む。

「仕方なかったのですね」

あつさりりと認めたイリに議長も長官も複雑な表情をする。女王が宮殿に常駐して何とかしてくれるかも知れないという淡い期待を持つ。強い女王が必要なのだ。それは独裁者を求めていると言えるのかもしれない。

一方でノロにも期待を抱く。女王の弟かどうかというよりノロの活躍でイリ国は中華民国から独立した。国名をイリライナー王国に変更してウイルス自治領などのように属国にならずに独自の道を歩むことができた。このように国民は理解していた。

*

「ところで長老は？」

イリは複数の大国の調略にタクラマカン湖畔で頭を打ち抜かれた長老を思い出す。ノロが「永遠の命を持っているから心配するな」と言っていたが期待していなかった。

「引退されました」

「ええ！　と言うことは……」

イリが立ち上がる。

「生きているのね！　すぐ呼びなさい」

長官が首を横に振る。

「無理だと思います」

「私がお願いしても？」

「多分」

「どうして！」

「行政府のアドバイザーになって欲しいと何度も懇願しましたが『年寄りほうるさくて老害をまき散らすだけじゃ』とかたくなに固辞されましたから」

「あの口うるさい、何にでも口を挟む長老が？」

イリにはわかenに信じることはできなかつた。一縷の望みが消えたような気分の中ため息を漏らす。

「あの長老が悟つたなんて」

いろいろな情報を収集し分析をしてから地球に向かえば良かったと反省する。榊や加藤が氣乗りしなかつた理由をやつと理解する。一方、親しいウクライナー共和国がソシアに侵略されている。

「爺や！ お願い！ 戻ってきて」